

## 第2回 青葉山エリア文化観光交流ビジョン検討懇話会 議事録

日時：令和4年11月8日（火）17：00～18：45

場所：仙台市役所2階 第一委員会室

〈出席者〉

【委員】

宮原育子座長、榊原進座長代理、姥浦道生委員、紫富田薫委員、庄子真岐委員、高山秀樹委員、深澤百合子委員、松田法子委員、藻谷浩介委員 以上9名（委員五十音順）

（※）下線を付した委員はウェブ参加

【仙台市】

金子文化観光局長、高島文化観光局次長、中山文化観光局次長（音楽ホール整備推進担当）、奥山観光交流部長、大森文化スポーツ部長、市川交流企画課長、神倉交流企画課主幹兼庶務係長、田中震災メモリアル事業担当課長、日下観光課長、川口企画調整担当課長、佐々木文化企画推進担当課長、佐藤交通政策課長、馬場都心まちづくり課長、熊谷百年の杜推進課長、阿部公園整備課長、都丸文化財課長

〈議事等要旨〉

### 1 開会

議事録署名委員について姥浦委員に依頼→姥浦委員了承

### 2 議事

#### （1）「(仮称) 青葉山エリア文化観光交流ビジョン」策定について

宮原座長： それでは議事に入ります。議事の（1）について、事務局から説明をお願いします。

交流企画課長： 交流企画課の市川です。本日の資料は、分量が多く、委員の皆様からご意見を頂戴する時間を多く取らせていただきたいと思いますと考えておりますので、要点を絞ってご説明させていただきます。

まず、資料1です。前回の懇話会での主なご意見を、エリア全般、回遊性、コンベンション、ビジョンの示し方の4つに分類し、まとめたものです。内容は記載のとおりですので、説明は割愛させていただきます。

続いて、資料2をご覧ください。こちらは9月7日に開催いたしました、第1回国際センター駅北地区複合施設基本構想に関する懇話会についての概要です。前回の説明しましたとおり、それぞれの懇話会の内容を共有しながら検討を進めることとしておりますため、報告させていただきました。こちらの内容は記載のとおりです。

次に、資料3です。これは青葉山エリアに関するアンケートについてまとめたものです。資料3-1は仙台市民を対象としたもの、資料3-2は市外にお住まいの方を対象としたものです。

資料3-1、表面右側のQ4では、エリアを訪れた目的についての設問で、博物館や美術館などの「文化施設」が最も高くなっており、「観光」、「景色・景観等の自然」が続いております。その下、Q5、Q6は、エリアを訪れる際やエリア内で移動する際の交通手段についてで、いずれも「自家用車」の割合が最も高くなっておりますが、エリア内においては「徒歩」の割合も高くなっているのが特徴的です。裏面のQ7～Q9は、交通手段や情報提供に関する満足度についてです。いずれも「満足」と答えた方は2割前後となっております。最後のQ13はエリアに期待することで、最も高かったのは「飲食に関すること」で、「各種イベントの開催」、「エリアに関する積極的な情報発信」が続いています。

次に、資料3-2ですが、こちらは仙台の観光地や観光資源について、市外にお住まいの方の「認知率」と「魅力度」を相関図にしたものです。青葉山エリアに関するものとして、「瑞鳳殿」と「仙台城跡」があります。いずれも魅力度は平均を上回っておりますが、認知率は、「仙台城跡」は平均より高くなっておりますが、「瑞鳳殿」は2割に満たないという状況です。

続いて、資料4をご覧ください。9月25日に開催しましたシンポジウムの概要をまとめたものです。榊原委員と藻谷委員にはパネリストとしてご出演いただき、榊原委員にはファシリテーターもお務めいただきました。資料には、パネリストの皆様にご発言いただいた内容と、裏面には、当日参加された方々から寄せられたご意見についてまとめております。その意見の中には、「特別な用事がなくても訪れる場所であってほしい」とか、「一日ゆっくり過ごせる場所になってほしい」などといったご意見がございましたので、ご紹介させていただきます。

続いて、資料5です。こちらはビジョンの構成と今後の検討スケジュールについてです。このビジョンは、記載のとおり3章立てとする予定です。第1章では、本ビジョン策定の趣旨、エリアの範囲、エリアのあゆみといった内容を記載し、第2章は、「青葉山エリアの現状等」として、各種計画における当エリアの位置付けや、第1回懇話会でお示ししたエリア内の主な施設あるいは進行中の事業、またエリア内で活動されている事業者や市民活動団体等にヒアリングを行っておりますので、こうした方々のご意見なども盛り込む予定です。第3章は、「青葉山エリアの基本的方向性」として、エリアのコンセプトや目指す将来像、その将来像実現に向けた取り組みの方向性、回遊性の向上等で構成いたします。下線部分が、本日の懇話会でご議論いただく部分です。また、資料の右側、次回以降の懇話会についてですが、第3回の懇話会を12月下旬、現在23日を予定しております。ここではビジョンの中間案の素案についてご議論いただきます。その後、市民の皆様あるいは関係機関の皆様にご意見をいただき、それを踏まえ、3月下旬に第4回懇話会を開催し、ビジョンの最終案についてご意見を頂きたいと考えております。

続いて、資料6-1をご覧ください。「青葉山エリアの特性と強み」として6つを掲げ、その要素となる主な資源を地図上で色分けしてお示ししております。まずは左上、「豊かな自然と歴史的遺産が残る特別なエリア」についてです。このエリアは、天然記念物青葉山や広瀬川など豊かな自然が広がるほか、史跡仙台城跡など、歴史的遺産を

有しております。今後、青葉山公園や西公園の整備により、憩い、安らぎの空間の一層の充実が図られます。

右上の「文化施設、教育・研究施設が集積する文教エリア」については、仙台市博物館や宮城県美術館をはじめとした文化施設、大学や高校などの教育施設が立地しており、国際センター駅の北側には、音楽ホールと中心部震災メモリアル拠点複合施設の整備を進めておりまして、文教エリアとしての充実を今後、図ってまいります。

その下の黄色の囲み、「仙台城跡、瑞鳳殿等から成る本市の主要観光地」です。青葉山エリアは史跡仙台城跡をはじめとし、瑞鳳殿、仙台市博物館などが立地する本市の主要観光地の一つです。

その下、このエリアは「東北大学、仙台国際センターを中心とするMICE拠点」でもあります。大規模学会等の開催時は、音楽ホール・中心部震災メモリアル拠点複合施設との連携・協力を図るほか、仙臺緑彩館などのエリア内資源の活用により、MICE機能の強化を図っていくことが必要と考えております。

左下ですが、「学都・仙台」と、先端技術の創造・発信の重要拠点」です。東北大学や宮城教育大学が立地し、高度な研究が行われていることに加えまして、次世代放射光施設(ナノテラス)の稼働により、新たなイノベーションの創出と地域経済への波及効果が期待されます。

最後のその上の「アクセスに優れた立地」についてですが、このエリア内は、地下鉄沿線であるほか、る一ぶる仙台が周遊しており、都心からのアクセスが至便であるといった特性・強みもあります。

全体を通じ、この色分けにあたりましては、一つの施設が複数のカテゴリーに跨るものがあります。そうした場合は、より要素が大きいと思われるほうに分類しており、例えば仙台市博物館は、赤色の文化施設としての要素と黄色の観光地としての要素を併せ持ちますが、より大きな要素を占めるとされる赤色に分類しております。

続いて、資料6-2をご覧ください。青葉山エリアの課題として、市民アンケートの結果などから、5つの視点で記載しております。

1つ目は「情報発信」です。エリアに関する情報提供に関して、アンケートの結果、「満足」と回答された方は2割に留まるなど、エリアに関する市の事業やイベント等に関する情報が市民の皆様には十分届いているとは言いがたく、一層の情報発信により、エリアの魅力や価値の周知が必要と考えております。

2つ目は「移動環境」です。市民のエリアへの移動手段は、自家用車の割合が約7割と最も多くなっており、イベント開催時やゴールデンウィークなどには交通渋滞が発生することもあります。また、エリア内には高低差があり、エリア内の移動には一定の制約もあります。こうしたことから、交通渋滞対策やエリア内及び都心とエリアの回遊性の向上といったものが必要と考えております。

3つ目は、「公共空間の利活用」です。エリア内には、文化施設をはじめとした公共施設のほか、公園や川などの公共空間が広がっております。市民アンケートによると、広瀬川の親水空間や、青葉山公園、西公園などの公共空間、こういったところの活用を期待されているところから、一層の利活用が必要であると考えております。

4つ目は「滞在環境」です。エリアに期待することとして、「飲食に関すること」の割合が最も多くなっており、より滞在を快適にする休憩スペースや飲食施設などが期

待されております。こうしたことから、多様な目的で訪れる人々が快適に過ごせる滞在環境の向上も重要な視点の一つと考えております。

最後に「連携体制」です。エリア内の一つ一つの資源は充実し、それぞれが来訪目的になっている状況ですが、エリア内外の施設や関係機関等が連携した取り組みは十分とは言えない現状と考えており、エリア内外の事業者、市民活動団体、大学、行政などが一体となって取り組みを推進することで、このエリアの魅力や価値、回遊性などの一層の向上につなげる必要があると考えております。資料6-2については以上です。

続いて資料7-1、青葉山エリアのコンセプトと目指す将来像についてです。

左上の囲みには、本市の最上位計画である基本計画の「まちづくりの理念」と「目指す都市の姿」を記載しております。その下には、エリアの特性・強みとして、緑色のボックスに7つの項目を記載しております。先ほど資料6-1で色分けしてお示した6つに加え、7つ目として「更なる価値を創出するプロジェクトの進行」という点を挙げており、それらがこのエリアの特性・強みだろうと記載しております。その下には、青葉山エリアと都心との関係性を示しております。青葉山エリアは都心とは違った特性や魅力を有しておりますので、相互に補完し連携することで、都市全体の魅力を向上させ、価値を創出していると記載しております。

こうした上位計画における理念や青葉山エリアの特性・強みのもとに、エリアのコンセプト案として記載したものが資料の右半分です。コンセプトの考え方としては4点挙げており、「仙台のはじまりと地という特別なエリアであり、市民が愛着と誇りを持ち、訪れたい場であること」、また、「歴史、文化、学術、自然などの資源に恵まれ、市民や国内外からの来訪者が多様な過ごし方、楽しみ方ができるエリアであること」、「エリアに新たな価値や魅力を加え、本市の歴史と未来をつなぐプロジェクトが進行していること」、「エリアが都心部を含めたまちの活性化を牽引していくこと」、こういったエリアであると考えており、これらにより導かれるコンセプトとして、右下のボックス、「歴史」と「今」と「未来」をつなぐ杜の都のシンボルゾーン ～特別な時間と空間を青葉山で～」を案としてお示ししております。

また、このコンセプトのもとに「目指す将来像」といたしまして、4つの点をその下に掲げております。これらの詳細につきましては、次の資料でご説明いたします。

資料7-2をご覧ください。先ほどの「目指すエリアの将来像」、こうした将来像の実現に向けた「取り組みの方向性」について、ビジョンが目指す10年程度先を見据えながら、将来像ごとに記載した内容となっております。

1枚目の左側、1つ目の将来像は、「人々の心を惹きつけ、ふと訪れ、巡りたくなる」です。「ハード、ソフトの個々の資源の魅力を有機的に結び、掛け合わせることで、エリア全体がテーマパークのように魅力にあふれ、季節を問わず、多くの人々の心を惹きつけ、ふと訪れ、巡りたくなる場となっている。エリア内では、市民や国内外からの来訪者が憩い、安らぎ、学び、交流する場として、思い思いに特別な時を過ごしている」というものです。取り組みの方向性としては、太字で3点挙げております。例えば、先ほどエリアの課題としてご説明した、「エリア全体としての情報発信の充実」、こういったことでまずはエリアの全容を知っていただき、明確に目的がない方でも、ふと

訪れたいくなるようなエリアを目指していくというものです。また、「エリア内の魅力を高める施設等の立地促進」とは、例えば、今後整備する音楽ホールの中に、魅力があって雰囲気の良いレストランやカフェなどを設けることで、それ自体が新たな目的地として多くの人々が訪れるようになる、といったことを想定したものです。

次に2つ目の将来像は「杜や水と暮らす都市文化を未来に引き継ぐ」です。「天然記念物青葉山、広瀬川、青葉山公園、西公園など、豊かな自然が市民生活の身近にあり、日常的に親しみ、くつろぎ、語り合う場として大切にされている。豊かな杜や水の恵みが人々の暮らしを豊かにし、自然と共に生きる文化が杜の都のライフスタイルとして未来に引き継がれている」、そういったエリアを目指すというものです。取り組みの方向性として、「憩い、自然に親しめる環境の整備」や「自然に触れる新たな楽しみや学びの機会の提供」、「広瀬川親水イベントの充実」を掲げております。エリアの課題として、移動環境や公共空間の利活用といったことがありましたことから、例えば、「歩行環境の整備」や「イベントの開催支援」などが具体例として考えられると思っております。

1枚おめくりいただき、左側の赤のボックスです。「歴史や文化・芸術を伝え、創造性を育てる」です。「史跡仙台城跡、瑞鳳殿、仙台市博物館など伊達政宗公以来の歴史を感じさせる拠点、美術館や音楽ホールなどの文化芸術の拠点、災害文化を創造する震災メモリアル拠点複合施設等で、様々な世代の市民による学びや創造的な活動が盛んに行われている。旅行者等の来訪者は、各種資源に触れエリアの魅力を味わっている」というものです。取り組みの方向性としては、「歴史や文化・芸術の資源を生かしたより深い学びや新たな楽しみの提供」、「音楽ホール・中心部震災メモリアル拠点複合施設を拠点とした新たな文化の創造・発信」として、例えば、博物館や美術館等の連携や企画などが考えられます。

右側、4つ目の将来像は、「学都の知と先端技術で未来社会をリードする」です。「東北大学、次世代放射光施設（ナノテラス）、仙台国際センター等が多くの学生、事業者、研究者等に活用され、世界をリードする研究や、MICEの実績を通して、新たな交流やイノベーションが生まれている。大学の知的資源や、エリア内で創出される先端技術が市民や来訪者にも開かれ、国内外の人々の学びや生活に寄与している」というものです。取り組みの方向性としては、「エリア内施設や関連事業者との連携によるMICE受け入れ体制の強化とMICE参加者の回遊促進」、また、「大学が有する知的資源、エリアで創出される先端技術を市民や来訪者に紹介し、活用される機会の充実」、「大学の知見や「防災環境都市」としての発信による、国内外の防災力向上への寄与」を掲げております。

続いて、資料7-3と7-4です。エリアの課題の一つであります、回遊性の向上に向けた取り組みの方向性についてです。

資料7-3は、エリアの移動環境の現状をお示したもので、第1回の懇話会資料と同様のものです。こうした現状を踏まえ、資料7-4ですが、こちらにエリアの回遊性の向上に向けた取り組みについて記載しております。「エリアの回遊性の向上」についてはもちろん重要ではありますが、それ以前に、まずはこのエリアに多くの方々に訪れていただくという「回遊の創出」が必要だろうと考えております。青葉山エリアが、「訪れ、巡りたいくなる場」となるために、特別な時間や空間を味わえるというエリアの

多様なストーリーを発信していくことが必要であると考えております。また、「都心」と「青葉山エリア」という特性の異なる2つのエリアが相互に連携し補い合うことで、それぞれの魅力を高め合っていくことも必要です。相互に魅力があるということが、このエリアと都心との回遊性の向上につながっていくものと考えております。そのうえで、回遊性の向上に向けた取り組みについて、左下の「エリア内の回遊性」と右下の「都心との回遊性」に分けて記載しております。

「エリア内の回遊性」に資する取り組みの方向性としましては、例えば上から4点目、「国際センター駅を起点としたアクセスの向上」については、高低差のある仙台城跡へのアクセスの向上や、環境に配慮した車両、あるいは先端技術により、例えば無人走行ができるような新たなモビリティの検討などが考えられます。また、その下の5点目の「快適な歩行環境の整備」として、歩行者動線の整備や、ウォーキング・ランニングコースの充実など、その下の6点目、「エリア内の魅力を高める施設等の立地促進」としましては、それ自体が来訪目的になるようなレストランやカフェ、こうしたものの立地も回遊性の向上に資する重要な要素と考えております。

次に、右下の「都心との回遊性」についてです。1点目、「交通事業者等との連携による回遊促進」については、Ma a Sの充実や、現在、宮城交通さんで実施している都心循環バスとの連携などが考えられます。また、3点目、「都心と青葉山周辺をつなぐエリアの賑わい創出」については、青葉山エリアと都心エリアとのつなぎ目にあたる定禅寺通や西公園、広瀬川などにおける様々なイベント等の支援や、4点目の「エリア内施設と中心部商店街等との連携」については、例えば大規模国際学会の開催時にユニークベニューとしてレセプションを中心部商店街で行うことなどを挙げております。

最後に資料8です。これまでご説明してきました、将来像の実現に向けた取り組みの方向性や、回遊性の向上策に沿って具体的に取り組みを進め、将来このエリア内では様々な楽しみ方や過ごし方ができるようになっている様子を、できるだけわかりやすくお伝えするために、このビジョンにはエリア内の様々なシーンを切り取ったパース図を掲載したいと考えております。現在、資料に記載の8つの場面についてパース図を作成しております。ビジョンをご覧になった方が青葉山エリアの将来の姿を想像して、ワクワクするようなものとなりますよう、進めてまいりたいと考えております。

資料の説明は以上です。

宮原座長： ありがとうございます。資料の1から8まで説明をいただきました。この中で、資料4、9月25日に青葉山エリアに関する市民シンポジウムが開催され、こちらには藻谷委員と榊原委員がパネリストとしてご出演されておりました。当日の様子やご意見について、榊原委員からお話を聞いてもよろしいでしょうか。

榊原座長代理： 資料4のほかに、今日追加資料として、シンポジウムの際にパネリストとして意見を述べたときのスライドの抜粋です。200名位の方が参加され、まずこの資料で、当懇話会と国際センター駅北地区複合施設の2つの懇話会があるということを説明させていただきました。そのあと、前回の懇話会でも都心と青葉山エリアが双子の関係にあるのではないかとということで、それを示せないかと思い、同じ大きさの楕円を地図上に示し、都心は赤で囲っています。同じ大きさで仙台駅からちょうど2km圏が広瀬川と楽天生命パーク宮城ということで、青葉山エリアがこのぐらい大きいエリアだということをご皆さんに分かっていただこうと思ったところです。下のスライドは高低差を示す

部分で、赤が濃くなるほど高くなり、都心は30mから40m位の標高ですが、青葉山エリアは相当な高低差があるということを示しました。

それを次のページで青葉山エリアと都心との比較を私の感覚で話をさせていただきました。そもそもの起源と地形、都市計画、土地所有、管理あるいは土地利用の特徴、イメージでいくと青葉山エリアは「静」とか「疎」ですが、都心は「動」と「密」といった話をさせていただいたところです。

次のページからは、私が代表を務める都市デザインワークスでは、広瀬川周辺を「せんだいセントラルパーク」と見立て、5つの楽しみとして、「食・巡る・佇む・知る・集う」をテーマにアクションをいろいろしてきた写真を紹介させていただきました。シンポジウムでは藻谷委員と垣内先生、木村先生で共通していたのは、市民がここで楽しむことが重要だということです。そうした意味では、まず青葉山に来てもらう仕掛け、まずは知ってもらう、来てもらうということが重要ではないかということがシンポジウムでキーになったことかなということです。

宮原座長： どうもありがとうございました。今、榊原委員から当日のスライドを含めてお話をいただきました。藻谷委員から何か補足はありますか。

藻谷委員： この発言の中で、榊原委員が言ったことを私が言ったことのように感じるところがあり、お恥ずかしいのですが。これは榊原委員と木村先生、お二人がおっしゃっていたと思っております。特に木村先生が、今の都心部分の商業地区と、城を中心とした政治的な都心が2つあって、双子都市だということをおっしゃっていて、私はこれで腑に落ちたと思い、それを繰り返し発言し、重ねてその通りだと言ったところが私の発言になってしまっています。ですから、決してよその人が思いついたのではなく、よく研究されている方がおっしゃっていて、これは他のまちで見ると非常に珍しいことです。正確に言うと、どのまちにも政治部分と商業部分が分かれています。大阪城の部分と大阪の商業地区は違いますし、皇居と東京の商業地区も違うといえば違いますが、2つが同じ大きさの半径で、今、榊原さんがお示しになったように双子で、しかもわずか1～2km離れた歩ける距離で、双子のように感じるのは仙台だけです。さらに木村先生がおっしゃっていたのは、伊達政宗はおそらく政治の中心である仙台城から、だんだんできていく商業の方の都心を見て酒を飲んでいたのは間違いないと。したがって、城に自由に立ち入れる時代になった今、逆に政宗は我々庶民がお城の跡に立って、まちの夜景とか昼の景色を見ながら、政宗公がやったように飲食を楽しむということは、決して間違っていないのではないかと。それを受け継ぐ行為なのではないかと、というようなことを申し上げたわけです。ただ飲食スペースがあった方がいいという話ではなく、そもそもそういうことを考えて政宗公が設計していたということが実は重要な点ではないでしょうか。それが1点です。

もう1つ、当日、私たちが言っていたのは、まち全体としてもっとウォーカブルなまちにして、市民がもっと歩くことを意識していいのではないかとということです。ウォーカブルという言葉はここにも出てきますが、なかなかそこまで踏み込んでいません。今、画面に映りますが、これはシンガポールです。私が2009年に1年だけ住んでいました。シンガポール人はとにかく歩かずに食べてばかりいて太るわけです。それを何とかしようということで、過去15年ぐらい、まちの中に、歩道だけでまちを全部横断できるような遊歩道プロジェクトというのを立ち上げて、延々と作ってきました。これは森ばかり写っていますが、海岸沿いにはボードウォークを作り、途中で飲食などを配

置しながら、全長 500km とされています。シンガポールの国のイメージが湧かないと思いますが、東京 23 区と同じ大きさで、人口 600 万人ですので 23 区の 2/3 ぐらいです。それぐらいのところなのでかなり詰んでいるわけです。かなり詰んでいるところに全長 500km の歩道を新たに作る。そこで日夜ジョギングとかウォーキングができるようにする。シンガポール人でやっている人はごく一部ですが、やっている人だけでもやるようにする。もう一度言いますが、仙台の人は歩かないと言うけど、そんなものじゃなくて、シンガポール人はもっと歩きません。ほとんど歩かないのですが、歩いたりジョギングする人のために、全長 500km のネットワークを市内に張り巡らすと言ってやってきて、私は始まった直後に行き、その後定点観測していますが、どんどん全長が延びています。利用する人が年々増えているのを実感します。

そこまでとは言いませんが、都市の戦略として、全市とは言わないが、青葉山エリアは基本的に歩きたい人が心ゆくまで歩いて、グルグル回れるぞという作り方をしてもいいのではないかと考えていて、その頭出しみたいなことを申し上げた記憶があります。

宮原座長： どうもありがとうございます。シンガポールの事例も頂いて、大変参考になりました。資料 1～4 はまずいろんな状況説明という形になっておりますが、こちらについて、何かご質問とかご意見はありますでしょうか。

姥浦委員： 資料 3-1 で、市民アンケートを取っていただいているのは非常に面白いと思いましたが、クロス集計を幾つかすると、さらにいろいろ見えてくるのかなと思いました。特に Q 7、8、9 の交通手段に関する満足度のところで、どういう交通手段で来ている人が不満を持っていて、どういう交通手段の人が満足しているかとか、そういうことが分かると、何をしないといけないのかということがまた見えてくるような気がしますし、おそらく他にも幾つかあるような気がしますので、クロス集計を幾つかしていただけるとよろしいかと思いました。

交流企画課長： クロス集計について検討いたしまして、次回のこの会議でお示ししたいと思います。

庄子委員： アンケートのところちょっと驚いたのが、Q 3 の「どのぐらいの頻度で訪れますか」という問いで、かなり少ないという印象を抱きました。観光資源というか、これまでの議論から、住民の方が賑わっているところに観光客が来ると。そうみると、住民の方がリピーターになっていないので、この辺は目標値としても「月 1 回程度」というのを割合として上げていかなければいけないということと、逆に、「週 1 回程度」とか「月 1 回程度」の方は少ないですが、それでも 40 人ぐらいいますので、ここの方々が、例えば Q 11、13 で、どういうことを求めているのかとか、何を期待されているのかを詳しく見せていただきたいと思いました。

交流企画課長： こちらにつきましても、もう少し詳細な分析を進め、次回お示ししたいと思います。

宮原座長： せっかくアンケートを取ったので、もう少し深掘りしていくと、そういったところが見える可能性がありますね。

藻谷委員： 回答数が 444 とかなり多いので、クロス集計には意味があると思います。

宮原座長： 皆さんからもそういったご意見が出ましたので、クロス集計をよろしく願いいたします。

では、続いて、資料 5 が「ビジョンの構成」、資料 6 が「エリアの特性・強み、課題」というところになります。ここでご意見、ご質問がありましたらお願いします

深澤委員： 今のお話の続きかもしれませんが、青葉山エリアが都市部と双子というのは当たり



前のことで、川を挟んで山の部分と都市の部分で、あえて双子と思う必要もないのではないかと伺っていましたが。青葉山エリアの現状で、「青葉山エリアの特性・強み、課題」というところと結びつきますが、青葉山は自然が豊かと皆さんおっしゃっているところで、既に生物がいるわけです。そういう生物をこれから増やしていこうというような市民の動き、要するに青葉山里山構想というのが動いていると思います。先ほど課長の説明でも、これからアンケートを取ったり、いろいろな地域の団体の取り組みや意見を聞くという話がありましたので、既にそういう里山構想というものがあり、青葉山を里山として捉えようという人たちが活動もしていますから、そういう話をに入れていったほうがいいと思いました。

それで、大手門と大橋をつないだ北側の部分と南側の部分では、様相が異なるので、こちらのビジョンの中にはそのへんが青葉山エリアということで、ごちゃごちゃになっていますが、両方の要素が含まれていると思います。つまり、自然を大切にしましょうというのもあると同時に、先端技術の創造と発展のために新しい施設を作りましょうとか、カフェを作りましょうとか、いろいろ箱物を作っていったりということは、ある意味、自然をどんどん侵食していくというような感じにもなりますので。里山構想の中では、そういうのはできるだけ排除したい。そういう排除の中で、資源である生物や、そこに生きている生き物を活用するような形での観光資源。新しく何かを作っていくのではなく、既存のものを大切に育て、それを育て、育てていくところに市民の憩いの場があり、それによって観光が行われるということを目指すというのは、別々に分けるとちょっと違って来るし、矛盾した2つのものが組み合わされていると思います。だから、そこは市民に分かるように、スマートに構成していかないと、こういうプロジェクトはうまく進まないのではないかと思います。自然が破壊されて困るという人たちはウンとなるし、そういうところではいろんな問題が起きてくるのは、多分重々ご承知だと思いますが、そういうことがないように、スマートにすり抜けなければ、なかなかやっていけないのではないかと思います。そのときに、キーワードに、自然を守ると一応書いてありますが、里山構想とかそういう自然を破壊しないということを担保するような言葉をきちんと入れておかないと。だから、こういうふうにしても在来のもとか既存の生き物に対しては損害が起きないよということを、担保するような形を組み込んだほうが、得策なのではないかと思います。

いろんな意味で活用することは可能だと思います。例えば、先ほどシンポジウムの資料を見せていただきましたが、これは全部人間が楽しんでいるところです。観光だからそういうふうになると思いますが、ここにいた鳥とか昆虫とか、珍しい植物とかはどこへ行っちゃうの、これだけ人が来て大丈夫なのと。例えばラフティングなどがありますが、せっかく川を鮭が上れるような道を作って上ってくるのに。例えば「広瀬川に鮭を戻しましょう」とか、これは札幌市で昔、豊平川に鮭を戻そうというキャンペーンがあって、札幌のど真ん中の豊平川に鮭が戻ってきたんです。それによってアイヌの人たちのお祭りなどもありますから、鮭祭りをやるのですが、そうすると、これは祭りになるし、鮭を呼び込むことによって人を呼び込むと。だから、人工的なものを作って人間が楽しむのではなくて、鮭を呼び込んで、そうすると人がついて来て、そこでお祭りもできるというような、動植物を仲間に入れてあげるような、そういうプロジェクトにしておいたほうが、わりとスムーズにいろんなことが進むのではないかと考えましたので、既にいろいろ構想ができていると思いますが、もう少し人間中心ではなく、在来の生き

物を追いやるということではないような、在来の生き物を加えることによって、それで観光なり人を呼び込むというような発想の転換をしてほしいと、そのように考えましたので、よろしくお願いします。

宮原座長： 貴重な視点を頂いたと思います。そもそも天然記念物青葉山ですよね。そういった意味とか意義がしっかりと伝わってくる場所というところは大事かもしれないですね。榊原委員、今のお話を聞いて深く頷いていらっしゃいましたが。

榊原座長代理： まさにおっしゃるとおりです。今、人間中心に写真が撮られていましたが、当然ながら自然があって、その資源を使わせていただいて、ということだと思います。実は写真にもある御清水の定期観測なども地道に行っていたりして、自然を大切にする視点も忘れない必要があるかと思っています。今のお話の、天然記念物青葉山、当たり前前に保全されるべきエリアだと、一般の市民の方からすると、そこまで知られていないところもあるので、もう少しそれを平易に伝えてもいいのかとは思いました。本当に豊かな自然、生物がたくさんありますので、それを人目線だけではない視点でここに出すということは、おっしゃるとおりだと思います。

宮原座長： 今の資料5と資料6、強みがある一方で課題もあるというところで、特に移動だとか交通について触れていただいています。強みについては、いくつかのカテゴリーに整理をしてという形で、特に施設ですが、こういったものが配置できている、というところがありました。

紫富田委員： 強みと弱みが表裏一体かなと思うのは、青葉山エリアがこれほどたくさんの強みがあるということは、ニーズが違った人たちが集まってくる場所なのだと思います。特に市民のアンケートから思ったことは、飲食に関することで、市民もそう思っているということが分かりました。私たちは学会や国際会議をやると、昼食難民になることがあって、医学会ですと、参加者はお昼にはお弁当が出たり、会議の正式な参加者はいいのですが、例えば展示会が行われたりすると、その出展関係の方たちはご飯を食べるところがないので、国際センター駅のカフェが人で溢れてしまったりということがあります。それをどうしたらいいのか、レストランがあったらいいと思いますが、会議をやっていない時のリスクはどうなのかということもあります。市民の方たちの憩いの場で素敵なカフェがあったらいいなと思われると思いますが、それを全部に合わせるとするのは難しいと思うので、例えば、その会議やイベントに合わせてキッチンカーが出せるようにするとか、そうしたことができるスペースを確保しておくことができれば、いろいろなニーズ、様々な魅力があるので、そのニーズに合わせて来た人たちにサービスが提供できるのではないかと思います。

先ほど視察の際にも話していましたが、東京の丸の内というところ、イメージはオフィス街で土日は人がいないだろうと思われるかもしれませんが、今は平日はオフィスワーカーが仲通りなどで昼食難民にならないようにケータリングのお弁当を食べていて、土日になると、例えば人工芝を敷いて子どもが遊べるようになって、ファミリーが過ごしているというふうに使分けられています。こうしたことがこの地域でも、いろんな目的で来た人たちがそれぞれ違うように楽しめる、というようなことができるといいと思います。

宮原座長： 飲食に関して、固定的な施設だけではなく、キッチンカーを入れたり、そこで食べるスペースみたいな、野外フードコートかもしれないし、臨時的なそういったものがセットできるような仕掛けというのもありだということですね。

紫富田委員： 交通の問題で、前回の懇話会で、例えば2千席の音楽ホールができれば、音楽が終わって一斉に帰るときに、地下鉄は大変だというコメントがありました。先日のぎふ信長まつりでは1万5千人集まって、事故にならないように、すぐに帰らないで柳ヶ瀬商店街を観光して帰ってくださいと誘導されたそうです。そのように、例えばコンサートが終わってすぐに帰る人もいれば、少し散策して帰る人もいればという形で、いろいろなメニューを提案して、交通の便が集中しないように調整できればいいと思いました。それが前回も申し上げましたが、Destination Management Organization (DMO) を作って、いろいろな関係者、例えば地下鉄や警察、市、商工会議所、商店街の方たちなど、関係者が集まって、今度こういうことをやるから、じゃあどうしましょう、ということが出来る組織があると、よりこの魅力が引き立つのではないかと思います。

宮原座長： 運営していく方法も考えていくということですね。

高山委員： 今の話と共通しますが、情報提供に満足されていないというアンケート結果です。施設が個々に情報発信するのではなく、民間のDMOなのか、それともエリマネなのか、もしくは仙臺緑彩館の指定管理者とか、どこか民間が、青葉山の情報発信プラットフォームみたいなものを作って、青葉山の情報を発信して、より認知度を高めるといった取組みが必要かと思えます。

また、移動環境については、自家用車の割合が7割ということで、これは市民ですが、市民だけではなく県内や周辺の県から仙台にいらっしゃる方は、高速道路を利用する方が多いです。そうするとどうしても車がベースで、確かにウォークアブルシティで、歩いて来ていただくというのが理想だと思いますが、実際にそういった方たちに来ていただくとなると、その車をどうするのかという問題が出てきますので、例えば都心部の駐車場と地下鉄をセットにしたパスをMa a Sで割安で販売して、都心に車を乗り捨てて、地下鉄で移動し、青葉山で遊んでいただいて、また都心に戻るの、そこで食事とか買物も楽しんでいただくとか。今後、複合施設ができると今ある駐車スペースがなくなりますが、仙臺緑彩館の方に駐車スペースが設けられるということでしたので、仙台で遊ぶ時、車で来られた方は青葉山をベースにさせていただいて、青葉山を楽しんだり、まちの中にも行っていただいたりとか、そういった車のことも考えなければいけないと感じております。

地下鉄や車という交通手段も大切ですが、歩いていただくことも大事だと思います。それによって都心と青葉山にいらっしゃる方がどちらも楽しんでいただける、駅から青葉山まで移動する時間も楽しんでいただく、そのためには、西公園や大町、青葉通、大手町周辺の歩くことを楽しんでいただく。そうした民間の投資を呼び込むような施策なども必要かと感じていました。

宮原座長： 今の交通のご発言については、資料7-4あたりですかね。「回遊の創出」のところの、エリア内の回遊と共に、都心との回遊というところでのご発言だと思います。

ほかにいかがでしょうか。資料7の方にも入っていければと思います。

副原座長代理： 先ほどの青葉山エリアの課題で、深澤委員の話聞いていて、特徴というか、強みでもあり、制約と言うのもおかしいですが、守るべきものがここにあるということ、それを課題と言うのもちょっとおかしいかと思っています。例えば、自然、天然記念物の青葉山があったり、史跡があるということは、今後、将来の取組みを考えるうえでの前提条件になるということ、特徴、特性、強みというだけではなく、課題でもないの、前提条件として一回整理しておくことが必要だと思いました。その上で、将来取り

組むための課題が出てくると、整理できると思いました。

深澤委員： 同じ意見ですが、“百年の杜仙台”とか“千年の杜仙台”とか、私たちは生きていませんが、百年先、千年先に青葉山が今のまま青葉山で残せるかどうか、そこはしっかり守っていきたい。千年経って、青葉山が今と同じ青葉山で残っていたら、仙台市民はものすごく意識が高い市民だというふうに残ると思います。残すものというか、百年後、千年後、十年後でもいいですが、今の青葉山をそのままの姿で残すにはものすごくお金がかかるし、ものすごく大変なこと。それを維持するのはどうするのかということ、考えていったほうが良いとも思っています。

庄子委員： 今の部分に共通するところと、資料7-1の「コンセプトの考え方」のところ、2つ目の「市民や国内外からの来訪者が多様な過ごし方、楽しみ方ができるエリアであること」というところで、私が前回、いろいろなストーリーを見せていて、多様な過ごし方ができるという話をさせていただきましたが、コンセプトを作るときに、「どんな楽しみ方もできます」と書いてしまうと、コンセプトにはならないと思います。コンセプトには、大事にしている思いや方向性を示さなければいけないと思っています。実際は多様な過ごし方ができると思いますが、住民の方が、例えば、今出てきたような思い、自然を大切にするとか、歴史を守っていく思いのもとで、楽しい過ごし方、楽しみ方ができるエリアとか。「多様な」の表現は、何がベースになっているのかを、コンセプトの中に入れていただきたいと思いました。

もう一つ、左側の「青葉山エリアの特性・強み」ですが、一番下は、もしかしたらS W O T分析のS (Strengths)を意識いるとしたら、「機会 (Opportunity)」になるのかと、“今後の機会”としてプロジェクトが進行しているとか。そうすると、“今後の機会”は、社会情勢で言うと、例えばM a a Sの進展や環境意識の高さとか、そういったことが評価されていくようになりますので、それに合わせて、青葉山エリアの良さがより伝わっていくと思いますし、そういう健康志向とか環境志向の高まりの中で、青葉山エリアはどうしていくというような強みもまた出てくると思うので、「強み」と「機会」を出していけると、今後のコンセプトやつながりが見えてくると思いました。

藻谷委員： 今、コンセプトとおっしゃったので、改めてコンセプトとして私がシンポジウムで思ったのは、資料7-3の地図にあるように、繰り返しますが、仙台の都心が特殊な双子構造になっているということは、シンポジウムの席上で言われていただけなので、なかなかまだ書くに至らないかもしれませんが、コンセプトとして重要ではないかと思えます。伊達政宗公がここを開発したときに、山と崖があり、横に台地があって、間に広瀬川の谷があります。ここにまちを作ると決めたときに、台の上はもう武家屋敷もありますが、まちにする。こっち側、川の反対側は防御施設にする。双子の都心をきっちり分けて作った。その後の仙台のまちを引き継いだ人たちが、明治維新以降、武家屋敷は開発されてしまったのですが、広瀬川から向こうを学術文化地区と天然記念物にして、全面保全し、今日に至るわけです。これはなかなかすごいことで、他のどのまちもやっていません。東京ですと皇居だけが守られていますが、あとは全部壊したわけです。ここまでまちの真っ二つ、半分を学術&天然記念物で守り通したということがコンセプトです。そうすると、その結果として、従来どおりそのまま置いておきましょうという考えもありますが、時代の変化に合わせて、守ってきた山側の方を壊さずに、もう少し親しめる空間にしようと。既に大学になっているところはある意味壊されているわけですが、それはそれで意味があったと。これ以上自然を壊さずに、しかし大学に関係な

い人も親しめる空間、コンベンションに行かない人も親しめる空間にすることで、本来双子都市だった仙台の、都心が2つあるということをもみんなで取り戻そうと、これがコンセプトなのかなと、私はシンポジウムを聞いていて思いました。

そういうようなことを踏み込んで書きにくいかもしれませんが、専門の方が本当にそうだとおっしゃっていただければ。他のまちのように、単に緑地があって、そこを歩けるようにしますという話と、実は全然モノが違います。強いて似ているのは皇居の敷地を、平成天皇になってから、一般人が入れるようにしたということがあります。ある意味、皇居として保全されている江戸城の空間を、一般人が入って散歩できる空間に広げた。それと同じようなことで、一切壊さずに、だけど市民が親しめる空間として、残ってきたものを再活用する。それはおそらく最初に作った伊達政宗公も望んでいるだろうと。そんな話だといいいのかなと思います。

したがって、そのコンセプトだとすると、当たり前ですが、自然を壊したら元も子もありませんし、パンフレットにも、ここに残っている自然の写真が出てくるのは当然だし、その上で、誰もいなくて保全されているのでしたら、面白山と同じになってしまうわけです。そうではなく、まちの横なので、壊さずに親しみをもって歩けるようにしましょう、使えるようにしましょうというのがコンセプトではないでしょうか。

宮原座長： また非常に良いコメントを頂いたと思います。

オンラインでご参加の松田先生、お待たせしてすみません。

松田委員： いずれも重要な議論だなと思って拝聴しておりました。先ほど、これから変わっていくところに関して、保全する部分とある種開発していく部分が、もう少し寄った状態の図などもいずれ必要になってくると思いました。例えば、楽しい使い方としてご紹介くださっている川床の周辺までは設備を入れるが、ここは鮭が上ってくる範囲なので入れませんか、あるいは季節に応じて使い分けるとかということなのかもしれません。心配されないような出し方、すべてについて資料を作るのか分かりませんが、争点になりそうなどころに関しては、「両立する」ということが明解になる資料づくりをしていけるといいだろうと思いました。

そういう形で今日出てきたいろいろなご意見が入ってくるものが、次回、ビジョンとしてまとまっていくのだと思いますが、そうしたことすべてに関する発信の部分、青葉山エリアのことを発信するという主体が必要だろうと思いました。労力がかかるだろうと思いますが、できそうなかどうか、見通しておいたほうが良いと思います。結構な頻度で発信し、多様な施設がありますので、その情報に精通してまとめて、さらに魅力を加えて発信するというと、これは大変なことだと思います。そのへんをどう具体的に描いていけるかということを考えてほうが良いだろうと思っています。

宮原座長： いろいろとご意見を頂いていまして。じゃあ姥浦先生、お伺いします。

姥浦委員： 資料はとてもよくできていて、あまりコメントすることはありませんが、一つだけ、「青葉山エリア」という言葉自体が、あまり認識されていないと感じております。そもそもこのエリアには名前がついていないというか、私は「青葉山」というと、自分の働いている、そこを想像してしまいます。川内とか国際センターとか、そもそもこのエリアがそういうエリアだということ自体が、少なくとも私は認識しておらず、私が標準的だとすると、ほかの人もあまり認識していないのかなという気もしております。

ですので、例えば観光マップなどに書く場合には、ここが青葉山エリアだということ必ず書くとか、周知というかPRというか、やり方はあると思いますが。そもそもこ

こが一体的なコンセプトのもとで作られてきて、それで今も作ろうとしていて、また将来こうしようとしているという、その言葉自体が認識されることがまずは重要ではないかという気がします。それが「青葉山エリア」という言葉でいいのかどうかという話も、ひょっとしたらあるかもしれませんが、このゾーンの言葉というのは非常に重要だと思いました。

宮原座長： そのものの「青葉山エリア」というところの名称について、少し考えたほうが良いということですね。

深澤委員： 私も思っていて、アンケートも、Q3の「青葉山エリアにどのぐらい」というのは答えにくい質問ですよ。博物館に行きましたかとか、美術館に行きましたか、何回行きましたかという質問なら答えられるけど、「青葉山エリアにどのぐらいの頻度で訪れますか」って、博物館にも行ったし、花火大会にも行ったしとか、多分答えにくいから、「週1回程度」なんてよく行ったなと思います。アンケートの質問が、あまり具体性がなく答えにくい設問だったのではないのかなと考えたので、どこまでそれを考えていったらいいのかと疑問に思いました。

おっしゃったように、「青葉山エリア」と言っても、私たちから言ったら、青葉山と言ったら大学の工学部・理学部のエリアで、仙台城と言ったらお城です。美術館と別々なものだから。あそこを一緒くたにしてエリアと言ったって、行くところは別々だなと思うので。そのへんを含めて、コンセプトの中に両方のものが入っているんですね。自然の部分とか創設とかそういう部分も入っているので、これをもうちょっと整理して、コンセプトの中にも二つに分けるとか。全部一緒くたにして、「青葉山エリアのコンセプト」と言ったら全部入るから、それだとすると焦点が合わなくなるので、もう少し具体的にコンセプトの中の考え方も二つに分けて、自然の部分をつめるのか、創造的な部分をつめるのか、それによって行く場所が変わるんだと、その目的によって違う場所を選ぶというふうに、もうちょっと整理したほうが。このままで行くと、ゴチャゴチャのままに出ていくのではないかと心配しますが、もう少しエリア間の中でも分類して、先ほど四つに色分けされて出してくださったのはいいのですが、それを全部まとめて一つの「エリアのコンセプト」とすると、結構危険だと思います。自然のものなのか、創設の部分なのかというふうな、具体的に分けたほうが、美術館、博物館とか、その部分も含めて整理されたほうがいいのではないかと思います。

姥浦委員： その部分は私は少しだけ意見が違ってきます。全体として、ファンダメンタルな部分でこれが共通しているというものが出てこない、これは深澤委員がおっしゃるように、駄目だという話になると思いますが、あればそれが共通の部分としてあって、その下にさらに詳細に見ていくとこういう機能もある、ああいう機能もある、そこについてはこういうふうに伸ばしていこうとか、というような話で、どう連携していこうかというような、二段構えでもいいという気がしております。

深澤委員： エリアで分けなくてもいいですよ、そういう意味では。博物館とか施設とかで分けて、それを一つのエリアというふうな、エリア、エリアと言うから、ここのエリアに人を呼び込もうという発想だからそのようになる。そういう発想ではないほうが、逆に整理できるのではないかと思います。

宮原座長： いろいろ議論が出てまいりました。

第3章になりますが、資料7-1が「エリアのコンセプト、目指す将来像」、資料7-2が「将来像、将来像実現に向けた取り組みの方向性」で4つカテゴリーがあって、

資料7-3が交通の整理と、資料7-4が回遊性の創出というところで知恵を出していただいております。気がついたことや必要な要素について、またご意見をいただきたいのですが。

私から一つよろしいでしょうか。資料7-1の組立て方にもなりますが、左側のところ。「まちづくりの理念」というのはいいのですが、先ほど藻谷委員のご意見を聞いていて、仙台は昔から伊達政宗公の歴史のことは、あんまり表に出さないというか、触れたことがないというか。私は東京から来たのですが、いろいろな場面で、政宗公の存在ってあんまりなくて。今日、藻谷委員から、政宗公の思いみたいのところとか、まちづくりの思いという中で、この仙台のまちの構造をちょっと語っていただいたところで、私もハッとするんですが、資料7-1のところでは、「エリアの特性・強み」から始まっていますが、やっぱりこの価値みたいな部分、強みとかそれ以前の、そもそものこの価値、自然的な価値と歴史的な価値、そこには、先ほどおっしゃってくださった政宗公の城下町づくりへの思いだとか、そういったところもあると思います。そのへんを踏まえたうえで、エリアとしての強みとか特性に入っていくと、先ほども皆さんいろいろおっしゃっておりますが、いろいろな施設や設備の機能の整理だけして終わってしまいそうな気がして、そうすると、市民や来訪者に共感を呼ばないというか、このエリアが素晴らしい、訪れる価値がある、そういった場所の価値みたいな部分を最初に伝えていった上で議論したほうがいいかなと思いました。

ということで、皆さん、いかがでしょうか。

藻谷委員： 今のお話はそのとおりだと思います。シンポジウムで木村先生がおっしゃっていたこととか、榊原委員がおっしゃっていたことを私が勝手に膨らませているかもしれませんが、他のまちでいくつか考えてみると、シンポジウムで私は札幌を比較して、そのあと東京との比較もしましたが、いくつかの似たようなまちの中における仙台としてのポリシーの明確化が重要だと思います。例えば、同じ時期にまちができたのは東京の江戸ですが、江戸の場合、私が知っている限りでは、家康は緑地をきちんと作ってそこを要塞にするみたいなことはやっていないんです。江戸城の範囲内しかやっていない。その代わりに、家康は銀座に商業地を作るということは明確に考えていたようで、大通りを敷き、その周りに商店を並べるという、今の銀座の地割は実は家康が作ったものだそうです。それとは別に日本橋が個別に発展するのですが、ですので、今でも銀座のまちをどうするという話をするときは、そもそも銀座一丁目から八丁目までは家康公が敷いた地割だと、必ずそこからスタートしているという認識が私にはあります。それと似たようなところがあって、銀座は一エリアでしかないが、仙台の場合はそれがまち全体、都心全体に残っているのだと思います。

同じく大阪ですが、大阪は太閤秀吉がその少し前に作るわけですが、実は秀吉時代のまちが全部壊れているので、どう作ろうとしたのかというものが全く残っていません。ですので、大阪にはそういう議論がなく、江戸時代に作り直されたものしかありません。

最後に福岡の話です。福岡は、古くからあるまちですし、黒田長政が入城して作るわけですが、実はその前に、室町末期に太閤秀吉がまちの都市計画を作りました。それで、今でも福岡でまちづくりをするときは、「実は太閤がこういう地割をして」という話が出てきます。そのあとの江戸時代に作った城下町の話とは全然違いますが、太閤がここに大通りを作って、ここに博多のまちを作ると。あとで黒田長政が出てきて、

福岡の城下町を別に作って、間をちょうど分けている境が大博通りという駅前の大通りですが、このようなまちの基本線があってという話が、福岡で話をするときには必ず出てきます。

単にここに人が集まって賑わったらいいよねという話は、もちろんいいのですが、その前にそもそもこういう思いでまちを作ったということを引き継いで語ることは、決しておかしくはないし、それが最初に敷いた人が太閤秀吉とか家康だとか伊達政宗みたいに、ものすごく経験がある人間が最初に敷いている場合は、それがやっぱり今の時代にそのまま生きるんですよね。私が言っていることではなく、先生がおっしゃっていることの中から引いて書かれるのであれば、ぜひ書かれたらいいのではないかと。それが他のまちと全然違う点だと、私は思います。

宮原座長： いろいろ議論が始まっていますが、事務局のほうで何かコメントがあればお伺いしたいと思います。いろいろ議論が広がりましたが、いかがでしょうか。

交流企画課長： さまざまご意見をありがとうございます。我々がこの案を作った中では素通りしてしまっていた視点や、欠けていた視点だったのかなと思い、改めて見直していたところです。エリアのコンセプトの考え方とそこに至る経過には、確かに基本計画のまちづくりの理念から、資料上は「特性・強み」と、ややジャンプしてしまっている感があったのかなと、ご意見を聞いていて思ったところです。1回目の懇話会では少し触れました、政宗公が縄張り初めを始めた経緯、歴史的な経緯ですね、そういった部分の純粋な歴史的な事実もありますが、そこへの思いというか、まちづくりに込めた考え方といった部分がもうワンクッションあってもいいのかなと感じております。

宮原座長： 引き続き、またいろいろ資料を見ながら、資料7-1は、あと「エリアのコンセプト(案)」というのがありますし、資料7-2のところ、それぞれの言葉と「取り組みの方向性」というのがありました。今までの議論でも、特に自然というところの議論が今回大きなものとして出されたと思いますので、ぜひ、懇話会から出た意見の中の柱としても捉えていただけるといいかなと思います。

他に何かありますでしょうか。

青葉山のもう1回前の議論のときに、高島次長にお世話になりましたが、あのときに、国際センター周辺のもう一つの機能として、防災の拠点の話があったような気がします。広いところですので、ちょうど議論が震災のあとぐらいだったと思います。今の国際センターの横にもう一つ建物ができていますが、当時はああいったところの広場を活用して、防災センターとか炊き出しができるような機能をつけたらどうだろうか、そういった話もあったかと思えます。そこらへんは、例えば今回のエリアの議論としては特に触れないという形でしょうか。

高島次長： 確かに10年前に、例えば青葉山公園の広い敷地を避難のゾーンにという、そういう議論があったと記憶しております。今のお話とは少し次元が異なりますが、新たな複合施設、それが中心部の震災メモリアルとしての機能を有するという一方で、災害文化の発信拠点として、単に展示やワークショップなどだけではなく、あのゾーン自体もそういうことを考える、そのような機能を目指していくことになろうかと思えます。いずれこのビジョンの中にどのような書き込みができるか、今、複合施設の懇話会が別に動いていますので、そこでの議論を参考にしながら、考えてみたいと思います。

深澤委員： 今、「災害文化」とおっしゃられたことですが、今日、頂いた資料の中に、複合施設のあり方を目指す方向性についての案ということで、音楽ホールと中心部震災メモ



リアル拠点の目指す方向性に「災害文化」の創造拠点とあります。「災害文化」とはなんだろうと。まず、災害は文化ではないと思いました。言葉として違和感がありました。防災文化なら分かりますが、「災害文化」というのは造語かわかりませんが、言葉として違和感があるものだと思って。これは、下に書いてあるような定義の言葉だとすると、もう少し的確な言葉を使ったほうが馴染みやすいと思うのでもう少し検討いただければと思いました。

宮原座長： ホールのほうの委員会の資料ですね。

震災メモリアル： 震災メモリアル事業担当課長の田中です。今、深澤委員からご指摘いただいた点に事業担当課長 について、コメントさせていただきます。

視察の際にお配りした資料は、令和2年に中心部震災メモリアル拠点の検討委員会を立ち上げまして、その中で有識者にご議論いただいた経過がございます。

そうしたご意見を頂戴することはしばしばございまして、我々の考え方としましては、災害そのものが文化だというつもりはございません。今の懇話会の中でも自然と歴史のお話を頂いていたかと思いますが、まさにそのとおりで、我々は自然と共に暮らし、自然から多様な恵みを与えてもらい、育んでもらったのが人間だと思っております。一方で、自然は時にその表情を変えて災害という形で我々に牙を剥いてくる。災害というものは、自然と共に生きている以上避けることはできないであろう。そうなったときに、それを乗り越えていくという文化、ということなのです。

「防災文化」ではないのかというご指摘を頂きましたが、防災文化はその概念の中に含むものだと思っています。なぜ「防災文化」ではないのかと申しますと、災害が起きたのちの復興・復旧も乗り越える術ということで含まれております。そういった考え方の部分等も丁寧にご説明、広報しながら、事業を進めてまいりたいと考えておりますので、ご理解いただければと思います。

深澤委員： 災害は文化じゃないので、ここに書いてあるものを読んで、無理に作ったんだなと思いました。だとしたら、「災害文化」と言うのではなく、それを表現するようなワード・用語が使われた方がいいのではないかと思います。これを見ていましたら、音楽ホールとメモリアル拠点というものを何とかドッキングさせたい、連携・融合させたいがために、無理やり「文化」という言葉を使ってやっている、苦勞しているというのが見え見えになりますので、もうちょっとスマートに、それは流していったほうが。多分両方の要素を入れたいがためだというような理解をしていますが、それをこういう形で出してしまうと、なんだこれは、連携・融合のためにわざわざ災害を文化にしたのかみたいな、そういう認識にもなりかねませんので。メモリアル拠点とか震災のものだったら、私からすれば、もっと海岸部とか。私は考古学ですが、杳形遺跡のような津波の痕跡が遺跡に出ているような、そういう遺跡のところをメモリアルホールとして、千年後、二千年後の人に、また津波が来るよということを教えてあげる。津波の警告のために発する建物であったり、メモリアルの場所だったらいいと思いますが、音楽ホールとこれをつなぐというのは無理な話ではないかと思っています。

宮原座長： その議論は他の委員会になりますので、少しまとめていただいて。

深澤委員： そのへんは無理にやるのではなく、スマートに処理してほしいと、そういう意見です。

宮原座長： 田中課長、ありがとうございます。

藻谷委員： 一言コメントさせていただきます。「災害文化」は、仙台市が考えた言葉ではなく、

世界的に定着した用語です。耳慣れないとお考えかもしれませんが、「防災文化」という言葉は世界的にはないです。「防災」という言葉自体が日本ガラパゴスと言われていて、日本人はできないことがわかっているのに防災と言うのですが、世界的には「防災」という言葉はありません。英語で言うと calamity mitigation、災害の緩和であって、calamity protection という言葉はないです。それは東日本大震災のときにかなり議論になって、「災害文化」というのは、つまり日本人が本来やってきたことで、防災といっても災害自体は防げないので、そのときに被害を最小限にし、そして最も迅速に立ち上がれるように、災害があることを前提としてどう対応するかという文化を「災害文化」と言います。市の方はご説明になりませんでした。本来はそういう意味であり、それは津波の話に限定されません。青葉山エリアにおける「災害文化」とは例えば何かと言うと、広瀬川が安定した川で深いところを流れていますが、逆に言うと、広瀬川が増水したときに流れるようなところに全く建物を作っていません。それは当たり前だとも思いますが、東京は隅田川とかちょっと増水したら冠水するところに家を作っているわけです。災害文化がないというか、そのたびにアウトになるのですが、仙台は最初から増水しても大丈夫で、かつ地震にも非常に地盤の強い丘の上にしかまちを作っていない。あと、細かいことですが、それが緩やかに北から南に傾斜しているために、そこに水道を引いて行って、さらに下水道も引いているのですが、電気が止まっても下水がきちんと自然に下に流れて行って、市内に滞留しないとか。実は優れた「災害文化」で作られたまちになります。

そのあたりは一般的に通用しないことかもしれないが、防災というか災害対応の世界ではわりと言われていることです。仙台には優れた「災害文化」があって、その一つの象徴が実はこの都心にあるということなのだと思います。

震災メモリアル事業担当課長： 藻谷委員からもご指摘いただきましたとおり、先ほど、政宗公の町割のお話がございましたが、河岸段丘の地形を活かした町割、大橋なども数々の大雨で流されるたびに復旧してきたり。あとは、下水の自然流下のお話も。政宗公の縄張りをはじめから、さらに戦災を経てもそれが大きく変わることがないという歴史の中で築かれてきたものだと思います。

先ほど文化というお話がございましたが、文化というのは人を活かしていく力というようなご議論を、先日の第1回の懇話会の中でも頂いたところでございました。今頂いたようなご意見も、複合施設の懇話会のほうにフィードバックしたうえで、議論に活用させていただければと思います。

宮原座長： 同じエリアですので、今日も貴重なご意見を頂いたかと思います。どうもありがとうございました。そろそろ時間も迫ってまいりましたが、榊原委員から。

榊原座長代理： 皆さんの議論を聞きながらずっと考えているのですが、何にもまとまっていないので、まとまっていないことで話をしますということをお置きしておきます。資料7-1の左下の、青葉山エリアと都心が双子で、お互い兄弟でありながら補完し合う関係だということで、都心だと商業・中枢・ビジネス・居住と書いていて、青葉山エリアは自然歴史・文化・観光・MICE・学術と書いていて、一方で、「エリアのコンセプト(案)」で目指す将来像は4つです。青葉山エリアの特性は5つになっていて、1対1にできないかと考えていて、この間のシンポジウムも含めてですが、市民の方にまず来てもらいたい、楽しんでほしいという視点からいくと、観光があることで急によそ行きというか、他の人が行く部分だと捉えられてしまうのではないかと思います。都心でも観光し

ますし、青葉山エリアでも観光をしますので、双子の都心全体で「観光」でいいのではないかと思っています。

自然と歴史は分けてもいいかもしれないというぐらいで、文化、学術、MICEというのは、MICEというのは都心でやらずにここがメインと考えれば、自然と歴史を大切に、守るべきものだと思えば、歴史と自然は一つずつでいいのですが、それぞれ歴史的経緯を含めて別物だというふうに捉えることもできるかなとちょっと思っています。また、文化と学術を一緒にするのもおかしいのですが、だから、そのへんがまとまっていないと思うのですが、そのへんを整理することで、隣の「目指す将来像(案)」というところの4つとテーマが1対1に対応していくと、スーッと入っていくかなと、思いました。都心との補完関係、都心との関係でこのエリアをどう見るかというものと、目指す将来像が1対1に対応していけるといいかなと思いました。「目指す将来像」の一番上というのは、「人々の心を惹きつけ、ふと訪れ、巡りたくなる」という全部盛りですが、これがまさに「観光」ではないかと思っていて、全部入ると観光ですという設えで整理できないかと思っていたところです。

もう一つ、「エリアのコンセプト(案)」で、先ほどの10年前の国際センター駅周辺整備の基本的方向性では、「エリアコンセプト」と書いてあって、「新たな魅力を創造・発信する杜の都仙台のシンボルゾーンへ」ということで、シンボルゾーンという意味では同じ言葉を使っていて、これも「歴史」と「今」と「未来」をつなぐ」という時間軸の話があるのと、「～特別な時間と空間を青葉山で～」という今の過ごし方の話と、時間軸と空間軸というのかわからないですが、何を軸にして話をしていけばいいのかということ、ずっと悩んでいて。まとまらずに話をしているのですが、まだ案なので、もう少し議論を深めつつ、できれば「目指す将来像」がもう少し整理されてくると、ここのコンセプトも結果的に決まってくるのではないかと思います。座長もおっしゃっていた、場所の価値というものがしっかりここに位置付けられていくことで、大切にしたい思いというのがコンセプトに位置づいていけるのではないかというのは、皆さんの議論を聞いていて思ったところです。

宮原座長： あともうお一方、お二方、ご意見を頂ければと思います。

松田委員： 歴史の部分と現在とこれからの強みがちょっと飛んでしまったのではないかというお話が、先ほど仙台市からありましたが、その上で、政宗公のところ、基本のところに戻ろうというお話があり、仙台という都市の出発点という意味では、そういうことでいいのだらうと思います。

一方で、この「青葉山エリア」と呼ばれようとしている部分が、現状いろいろ課題はあるが、その文化・学術・自然歴史という意味で豊かな場所であるという認識はあると思います。その豊かさ自体もきちんと説明したほうがいいだろうと、そこに関わるのが、ここがどんなふうに変わってきたかということも、まずきちんと明解に示したほうがいいだろうと思います。

政宗公と現在の間にある、現代寄りの大きな変革期というのは戦災です。これも災害とも関わりますが。例えば今、青葉山公園が作られているここが大きな空地として残っていたのは、戦後の追廻住宅という、焼け出されてしまった方たちの住宅がずっとあったからで、そういう歴史も背負った土地。それより一つ前に行くと、片倉屋敷という武家屋敷、家臣の屋敷があったわけですが。このエリア自体のいくつかの歴史のレイヤーを、自然でも言えると思いますが、自然と学術と文化ということで見せてあげる

と、どんなふうにここが変わってきて、それが今の豊かさにつながっていて、そうすると何に対して、つないだり手を入れたりしようとしているのか、ということがわかりやすくなるのではないかと思います。

自然も、手つかずの自然ということはあまりないと思います。そもそもが御裏林ですので、伊達家が使うために維持していた森ですから、そこもきちんと説明すべきだろうと。その上で、そこに貴重な生態系がさらに作られているということがわかるような資料を挟んでいくと良いのではないかと思います。

宮原座長： 今日議論がいろいろ飛びまして、事務局のほうで受け取りたい情報が行ったかどうか、定かではありませんが、そもそもという重要な部分を今日は委員の皆さんが数多く指摘くださっていらっしゃいますので、大変かと思いますが、そこらへんのことを整理しながら。最後に松田先生からも、時間の変遷、このエリアの地域の変遷の過程というのも一つ見せていくということも大事ではないかというご意見も頂いておりますので、そこらへんも一度考えながら、資料のほうを整えていただければと思います。最後に事務局からご意見等がありましたらお願いします。

交流企画課長： 様々なご意見を頂きましてありがとうございます。先ほども申し上げましたが、我々が資料を作る中で、欠けていた部分と申しますか、考え方を多方面からアドバイスを頂けたものと思っております。どう最終形に近づけていくかというところは、知恵を絞りたいと思っておりますが、いずれも貴重なご意見ということで参考にさせていただきます。

宮原座長： 資料8はパース図案ということで、それぞれのパースのイメージの文章を書かれています。先ほど事務局からご説明いただいたとおり、現在、作成作業中だということでしたので、引き続きよろしくお願ひしたいと思ひます。

## (2) その他

宮原座長： それでは、議事(2)その他になりますが、皆さんから何かありますでしょうか。

紫富田委員： この青葉山をどういうふうにしていこうかという時に、市民だとかそこにいらっしゃる方の視点がほとんどだと思いますが、例えば、MICEにしる、音楽ホールにしる、外からの人がいろいろ来て、そこで何か魅力を見出したりということもあると思うので、イメージとすると、市民やそこにいる人たちと外から来た人が、共に創り上げるとか育てていくというようなエリアになればいいのかなと思います。国際会議を私たちが誘致するとき、この都市でこの国際会議をやってくれたら、こんなメリットがありますという、開催地のメリットばかりをPRするのですが、開催する人は、「僕たちがここで国際会議をやることによって、この地域にどういふ影響を与えられるかということ、僕たちは気にしている」ということを言われたことがあり、目から鱗でしたが、そのように理解すると、市民も楽しむんですが、外からの客を入れたいということであれば、一緒に育てるとか作っていくというようなところがどこかに入れればいいと思ひます。

宮原座長： これも大変重要な視点かと思ひます。

事務局からその他として、何かありますか。

交流企画課長： 特にございませぬ。

宮原座長： それでは、特にないようですので、以上をもちまして、予定の議事はすべて終了いたしました。委員の皆様、今日はまた大変活発にご意見を頂きまして、本当に感謝申し上げます。

げます。それでは進行を事務局のほうにお返しします。どうもありがとうございました。

3 その他

4 閉会

以上、議事等の記録内容につきまして、すべて相違はありません。

令和 4 年 12 月 19 日

議事録署名者

(委員)

姚浦 道生

---

(座長)

宮原 育子

---